

## 自由連想法の再考 フロイトのドーラの事例を再分析する

### Reconsideration of the Free Association Method — Reanalyzing Freud's Case of Dora

中 村 俊 哉

Shunya NAKAMURA

福岡教育大学

(平成27年9月30日受理)

#### 抄 録

近年自由連想法の意義が再確認されているところであるが、本稿ではフロイトのドーラの事例を自由連想部分とそれ以外を区別することによって、ドーラの中でより女性への同一化の連想と知的好奇心に関する連想が活発であることを示した。自由連想法の活用により事例理解につながることを、ラカンなどの分析と比較しながら論じた。さらに、自由連想それ自体に治癒力がある可能性を示し、今後の課題につなげた。

#### はじめに

自由連想の意義は、これまで考えられていた以上に大きなものと思われる。心理療法の中でクライアントが自由連想を活発に出来るかどうかということは、かなり大きな治療要因となるだろう。日本精神分析学会の2009年のシンポジウムテーマは「自由連想の臨床的意義—関係すること、夢見ること、想像すること」であった。その中でも社会的な側面にまでこの議論を広めた報告が、平井正三の「自由連想あるいは言論の自由について」であった。

そこで平井は、「言論の自由の考えの基盤には、真実か虚偽かは一人の人間が決定できることではなく、開かれた場でできるだけ様々な考えが提示されることを通じて、最終的に社会が真実に接することができる可能性が高くなるというミルトンの考え方がある」とする。その背景には「社会は真実と接触している必要があること、そして真実から遊離すれば病的もしくは停滞状態に陥る危険性があるという認識がある」とし、社会がより健全であるためには、言論の自由を保障し、民主的である必要がある」とする。平井の指摘するように、フロイトは社会状況を個人の心の状態のモデ

ルとしており、自由連想の意義は、個人の心理療法にも社会の健康にも関連していると言えるのである。そして、精神分析における自由連想は、メルツァーのいうように「自分自身の心の状態を観察し、それを報告する」ことである。

さて、フロイトが自由連想法を始めて間もない頃のドーラの事例研究論文は、自由連想法の意義からみて、きわめて貴重であるが、残念ながら事例記録自体が残っていない。論文では、フロイトの取り上げたい論点がフロイトの視点で選択的に述べられており、そこに限界を見ることが出来る。しかし、ここで注目されるのは、ドーラは意外にも多くのことを語っていることであり、このことはもっと注目されて良い。父親に連れてこられたという外的な要因から、必ずしも自発的ではなかったような印象があるドーラであるが、週6回、3ヶ月、70回に渡ってフロイトの元に通ってきたことは事実である。また、フロイトが自分の言葉に変換していても、ドーラの口からしか得られない情報を多く書いていることから、自由連想が活発だったことが分かる。

ここで大事なものは、どこが本物の自由連想であり、どこがフロイトの視点でセレクトされた部分

かを、丁寧に区別することである。そこで、本稿では第一に、純粋な自由連想部分を明確にして、そこが最も重要なところであることを明らかにしたい。フロイトの考えや、父から聞いたことなどに影響された判断などは、極力除外する必要がある。それによって、むしろこの事例の重要性が浮かび上がるであろうし、フロイトの視点の創造性も確認できるであろう。

ドーラの事例を多くの分析家、思想家が再分析し、考察しているので、これらを比較対照した上で、今回抽出した自由連想部分をみると何が最も重要であるかが浮き彫りにしたい。

### 結 果

以下に、純粋に自由連想部分をあげていく。ここには、質問や明確化、解釈への回答も含めた。フロイトがドーラの言説を描写したものや解説も含めた。ドーラが語らなければこれらは生まれなかったと判断できるものに限る。

主語が「私」で始まる文章と主語がない文章は、ドーラの語りとしての記載である。主語が「彼女」で始まるものは、フロイトの言葉としての引用である。( ) 内の言葉は、筆者が付け加えたものである。また、文末の数字は、該当ページである。最初の数字はGW-Vのページ、次の数字は岩波版のページである。

1 たいていは兄がまず病気に罹る、病気の程度は軽い、それにつづいて自分が病気になる、その症状は重い。(GW-V179 岩波 20)

2 彼女の食欲は不十分で、食べ物に対してちょっとした嫌悪感があるのだと彼女は漏らした。(188 岩 31)

3 いまもなお、あの抱擁による上半身への圧迫を感じる。(188 岩 31)

4 (男性の体が興奮しているときの身体のサインについては) 今は知っていますが、当時は知らなかったと思います。(189 岩 33)

5 この人(K氏)との関係はもう終わったと主張した。(190 岩 34)

6 (母が、父が森の中で自殺を考えたがK夫人が救ったと述べたことについて) 私にはもちろ

ん、そんなことは信じられません。おそらく二人は森に一緒にいるところを見られてしまったのでしょう。父はそのとき、このあいびきを正当化するために自殺の物語をでっち上げたのです。(191 岩 36)

7 (ウィーンに引っ越すことになったとき) これは何か裏の事情があるのではないかと考えはじめていた。(192 岩 37)

8 Kさんたちは、いま現在もこのウィーンにいます。私はよく、父がKさんの奥さんと一緒に通りを歩いているところに出くわしてしまいます。Kさんにも何度も出会います。Kさんはいつも私のことを目で追うのです。一度、私が一人で歩いているときに会ったことがありました。そのときは、かなりしつこく私のことを後ろからつけていました。私がどこへ行こうとしているのか、もしやあいびきではないのか、確かめたかったのでしょうか。(192 岩 37)

9 1節注 20 この家庭教師は、性生活の本やそれに類する本などあらゆる本を読み、それらについてこの少女と語り合ったりした。しかし、彼女は大胆にもドーラに、「ご両親がどのような立場をとるか分からないので、こういった関連の話はすべてご両親には秘密にしていしてほしい」と頼んできた。(195 岩 41)

10 こういった彼女(家庭教師)の行いの数々のために、ドーラが気分を害しているわけではなかった。彼女が初めて激怒したのは、自分自身などこの家庭教師にとってまったくどうでもよい存在であって、自分に向けられていた愛情が実際は父親に向けられたものだ気づいたときであった。父親がこの工場のある街を不在にしているあいだ、この女性はドーラに時間を割くこともなく、いっしょに散歩をすることもなく、彼女の学習に関心を払うこともなかったのである。父親がBから戻ってくるやいなや、彼女はふたたび、どんな仕事でも手助けをするといった態度を見せるのであった。そういったわけでドーラは彼女との縁を切ったのである。(196 岩 42)

11 私(フロイト)がこの推論(ドーラが何年かにわたりK氏に恋をしていること)を口にしたとき、彼女からの同意は得られなかった。そのときドーラはすぐに、「そういったことを言う人は

ほかにもいました。たとえばBをひととき訪れていた私のいとこの娘などは、あなたほんとうにあの人にぞっこんなのね、と言いましたし」と述べた。でも、ドーラ自身は、そんな気持ちを感じた覚えはないと主張した。のちに素材がたくさん現れるようになるとこれを否認し続けるのが難しくなり、ドーラは「BにいたときのKさんのことは好きだったかもしれませんが、それはあの湖畔の一件があって以来、終わったことです」と白状した。(196 岩 42-43)

12 彼女が言うには、そんな症状(胃の痛み)ははじめてだった。私はそのとき、「それは誰かの真似なのだろうか」と尋ねたが、その問いは凶星だった。その前日、彼女は亡くなった叔母の娘に当たるいとこたちを訪ねた。妹は婚約したのだが、それをきっかけに姉が胃痛を起こすようになっていた。姉は治療のためゼメリングに行かされることになっていた。ドーラは次のように言った。「この姉の場合それは単なる妬みによるものです。手に入れたいものがあるといつも具合が悪くなるのだから。今回は、妹の幸せを目の当たりにしたくないから、それで都合よく家を離れようと思っているのでしょう」。(197 岩 43)

13 彼女はそれ(K夫人が夫が旅から帰ると調子を崩すこと)を、夫の在宅が妻を病気にさせていると理解していた。すなわち、病気であることは厭わしい夫婦の営みの義務を遠ざけるので、K夫人にとっては望ましいことだった、と考えていた。ここでドーラは唐突に、自分がBで過ごした少女時代の初めの数年間は、病気と健康の状態が交互に入れ替わっていたことを一つの見解として付け加えた。(198 岩 44)

14 (失声を伴う咳の発作は、平均してだいたいどれくらいつづくかという問いに)三週間から六週間つづくとのことだった。Kさんはどのくらいの期間留守にしていたのですか、と尋ねると、彼女は、それも同じように三週間から六週間のあいだでした、と認める他なかったのである。(198 岩 45)

15 失声が始まった最初の数日間は、「書く方はいつもとりわけ簡単に行うことができます」ということであった。(199 岩 45)

16 K氏はドーラに旅先から多くの便りを書き、

絵はがきを送った。であるから、ドーラだけが彼が戻ってくる日時を知らされ、K夫人のほうは、戻ってきた彼を見て驚くという具合であった。(199 岩 46)

17 (あの湖畔の一件について)「あのときおまえはそう思い込んだだけなのではないか」と父親が言ったことを思い出すたびに、彼女は怒りで我を忘れるのであった。(205 岩 54)

18 父への非難は、嫌になるほどの単調さでくり返され、同時に咳もつづいていた。(206 岩 55)

19 ドーラは、またしても、「Kさんの奥さんが父のことを好きな理由は単に、父が役に立つ男だからです」と強調した。(207 岩 55)

20 (フロイトが、普通の恋愛関係との主張と不能の主張の矛盾を指摘された後)彼女は「わたしは性的満足を得る仕方はべつに一つではないことを十分よく知っています」と言うのだった。(207 岩 56)

21 (フロイトから生殖器以外の器官を使うことがあるという意味かを問われて)彼女は「そうです」と応えた。そこでわたしは、つぎのように問いを進めることができたのだった。「そう答えるからには、あなたは今まさしく、病気で敏感になっているあなたの体の部分(喉、口腔)のことを考えていますね」と。ドーラは、自分はさすがにそこまでは考えていなかったと言い張ったが、それはもっともなことであった。(207 岩 56)

22 彼女は、幼い頃の自分が「おしゃぶりっ子」であったのを大変よく覚えていた。(211 岩 60)

23 ドーラ自身が幼年時代の光景としてはっきりと記憶のなかにあるのは、自分が部屋の片隅の床に座って、自分の左手の親指をおしゃぶりしつつ、右手は近くにおとなしく座っている兄の耳たぶをつまんでいる、という光景であった。(211 岩 61)

24 (父親について)「それ以外のことについて考えることができないのです。きっと兄はわたしにこう言うでしょう。「子供の僕たちが、お父さんのこういった行動について批判する権利はないね。僕たちは、それを気にするのではなく、



ひょっとして、お父さんが心を寄せることのできる女の人を見つけたことをむしろ喜ぶべきなのかもしれない。だってお母さんはお父さんのことをほとんど理解していないのだから」と。そのことは私も理解しているし、兄のように考えたい気持ちもあります。でも、できません。私は父を許せないのです」。(214 岩 65)

25 (フロイトが父への愛着は早い持期から恋着という特徴をもっていたと考えざるを得ないと伝えらる)「思い出せませんわ」と答えた。しかしそれにつづいてすぐ、(母方の)いとこの7歳の女の子—ドーラはこの娘に自分自身の子供のときの面影をしばしば感じたものだと言った—について、似ている話を言い出したのである。その女の子があるときまたしても両親の激しいけんかを目撃してしまった。女の子は、そののち家を訪れたドーラの耳元でつぎのようなことをささやいたのだ。「わたし(母親を指さして)あの人が大嫌い!おねえちゃんが想像できないくらいにね。あの人死んだらお父さんと結婚するわ」。(217 岩 68)

26 (フロイトがドーラに、K氏への気持ちを抑圧し、幼少期の父親への愛着を呼び起こしたこと、彼女がひっきりなしに嫉妬の憤激にとらわれるのは別の決定因が考えられると説明すると)ドーラはこれ以上ない強さの断固とした抗弁を行った。ドーラは、「わたしはKさんに対する怒りを、Kさんがわたしから当然受けてしかるべき程度にぶつけることができないのです」と告白した。そして彼女はつぎのように語った。「以前に通りでKさんとばったり出会ったのですが、わたしはそのとき、Kさんのことを知らない、いとこの女性といっしょでした。そのいとこが突然こう叫んだのです。「ドーラ、どうしたの。顔色が真っ青よ!」って」。(219 岩 70-71)

27 「今日はとても気分が悪いです。今日は伯父の誕生日ですが、どうしてもお祝いをする気になれません。なぜなのかは分かりません」。(中略)  
すると彼女は突然、今日はK氏の誕生日でもあることを思い出した。(219 岩 71)

28 彼女自身どうしてそうなったのか不思議に思うような、人と疎遠になった話を行うことがしばしばあり、特別に力をこめてこだわるのだった、彼女は、のちに婚約した、いとこの二番目の妹の

ほうとは、いつも特別によい関係を保っており、あらゆる秘密を二人で共有していた。さて、あの湖畔の滞在が途中で打ち切られてしまっ以来はじめて、父親がふたたびBに赴く機会がやって来たが、ドーラはもちろん父親に同行することを拒否した。そこで、このいとこに父親との同行の白羽の矢が立ち、彼女はそれを受け入れたのである。ドーラは、自分には彼女を強く責めることなどできないと十分承知しているにもかかわらず、そのとき以来、彼女への思いが冷めてしまっている自分に気づき、彼女のことももうどうでもよくなってしまった自分をいぶかしく思うのであった。(221 岩 74)

29 この若い夫人とまだ子供だった頃の少女(ドーラ)とが何年にもわたってきわめて親密な関係にあったことを知ったのである。ドーラがK家に滞在したときは、夫人と寝室をともにした。つまり夫は寝室を出されてしまうのだった。(221 岩 74)

30 ドーラは、K夫人について話して聞かせるたびに、彼女の「その魅惑的な白い肢体」を褒め称えるのであった。その口調は、自分が敗北を喫した恋敵に対するそれではなく、むしろ愛する者にそう言うのがぴったりの口調であった。また別の折り、ドーラは、苦々しげというよりも悲しげに、「父がわたしにくれたプレゼントは、Kさんの奥さんが買ったものに違いないです。私、彼女の趣味が分かりますから」と語った。さらに別の折り、ドーラは語気を強めて、「私がプレゼントとしてもらった装飾品は、やっぱりKさんの奥さんが一役買っていました。似た装飾品を彼女のところで以前見えていますし、そのときわたしは「欲しい」って声に出して言ったのです」と話したのであった。(222 岩 75)

2節、第一の夢については、本文は省略し、連想部分のみの引用とする。

31 (くり返される夢なので、最初がいつかを尋ねると)ドーラは答えられなかった。しかし彼女は、L(K氏との一件があった湖畔の場所の地名)で三晩続けてこの夢を見たことを思い出した。それからのち、数日前、ここで(ウィーン)ふたたびこの夢が表れたのであった。(225 岩 78)

32 (夢を細かく分解し、そこから思いつくことを報告するよう求めると)「では話します。最近父が母とけんかをしたのです。母が夜、ダイニングに鍵をかけてしまうので。つまり、兄の部屋にはちゃんとした出口がなく、ダイニングを通らないと部屋から出られないのです。父の言葉では、「そんなことをしてはだめだ。夜のあいだに外に出なければならぬことが起こるかもしれないじゃないか」というわけです」。(226 岩 79)

33 「当時わたしたちが、つまり父とわたしですが、Lに着いたとき、父は火事が心配だということをはっきり口にしていました。Lに着いたときの天気は、激しい雷雨でした。私たちは、避雷針のついていない小さな木造の家を見ていたのです。そんな状況でしたから、こういった心配はまったく自然でした」。(227 岩 80)

34 (フロイトが夢が出来事の後であることを確認した後、3回でなく4回くりかえせたはずだと指摘)「わたしたち、つまりKさんとわたしですが、あるとき船で湖の遊覧を楽しんだことがありました。昼頃に戻り、わたしはその日の午後、いつものように寝室のソファに横になって少し眠りました。ふいに目を覚ますと、Kさんがわたしの前に立っているのが見えたのです…」。(227 岩 81)

35 「わたしはKさんに、何か探しものですか」と問いつめました。Kさんの返事は、「自分の寝室に行きたいときに行くのは構わないと思うがね。それに取りに来たものがあつたのだよ」でした。そんなことがあってから用心するようになり、わたしはKさんの奥さんに、寝室に鍵はないのですかと尋ねました。それでつぎの日(二日目)の朝は、身だしなみを整えるために鍵をかけることができました。そして午後、ふたたびソファに横になろうとして鍵をかけようとおもったら、鍵が見当たりません。Kさんが片づけてしまったに違いありません」(以下省略)。(228 岩 81-82)

36 (装飾品について)わたしも前は大好きでした。しかし病気になってから装飾品を身につけることはなくなりました。—4年前(夢を見る1年前)のことですが、父と母がある装飾品のことで派手なけんかになったことがありました。母にはとくにこれがほしいというものがあつたのです。

滴の形の真珠の耳飾りです。しかし父はそれを好まず、滴の耳飾りではなく、ブレスレットを母に渡しました。母はひどく腹を立て、父にこう言ったのです。「ほしいなんて言っていないものにそんなにたくさんのお金を遣うなんて。ほかの女の人にでもあげたらよかったのよ」って」。

(フロイト「あなたはそのとき、「わたしだったら喜んでもらっておくのに」と考えたのでしょうね」)。「分かりません。そもそも、どうして母が夢に現れたのか分かりません。当時、母はLにいなかったですし」。(230-231 岩 85)

37 (箱について)そうですね、少し前にKさんがわたしに高価な宝石箱をプレゼントしてくれたことがありました。(231 岩 86)

38 (ポシェットを使ってそれとなく示したもの、女性器を表すとの指摘に)先生がそうおっしゃるだろうことは分かっていました。(231 岩 86)

39 (外に出なければならぬことから連想される、おねしょについての問いがなされ、「二人の子供たち」に含まれる兄について問われたあと)自分のことは何も思い出せません。けれど、兄は5歳か6歳のときまでおねしょをしていました。ときどき昼間もおもらしをしていました。(つづけて)そうでした。わたしもおねしょをしていました。しかし、6、7歳の頃のことで、しばらくつづきました。状態はひどいものだったにちがいません。今気づいたのですが、お医者様にも相談したようです。おねしょは神経質症の喘息が始まる少し前までつづきました。(234-235 岩 90-91)

40 ドーラは、その翌日にこの夢の補足説明を行ったのである。目が覚めるたびに煙の臭いがしていたことを話し忘れたという。(235 岩 91)

41 もっぱら私たち二人の関係に終始するこういった解釈に対して、「Kさんも父もものすごいヘビースモーカーです」と言って異議を唱えた。(235 岩 92)

42 ドーラもあの湖畔でタバコを吸ったことがあつたが、それは当時、K氏があの不幸な結末に終わった求愛を始める前に、タバコを紙で巻いて彼女に渡したからであつた。また、彼女の信じるところによると、煙の臭いは、最後の夢ではじめ

て現れたものではなく、Lで見た夢三回ともにすでに現れていたことをはっきり思い出したのだった。(235 岩 92)

43 この少女は、驚いたことに、父親の病気がどのような性質のものであったか、知っていた。彼女は、父親がわたしの診療室から出たのちの会話を立ち聞きし、その病気の名前を耳にしたのである。(中略) 当時、この好奇心旺盛でしかも心配性の少女は、年老いた叔母が母親に「あの子は結婚する前から病気だったからねえ」と言い、さらにドーラにはよく意味が分からないこと―のちに彼女はそれをいかかわしい事柄と解釈した―を言い添えたのを聞いたからである。(237 岩 94)

44 (母親への同一化に固執しているというフロイトの論述の後)そして今や、わたしはドーラから聞いて知ったのだが、自分にはカタル(白色帯下)がある、その始まりがいつだったかは思い出せない、とのことであった。(238 岩 95)

45 (フロイトがマスターベーションについて解釈すると)「そのようなことは思い出せません」とそれをきっぱり否定した。しかし数日後、彼女はある振る舞いをしたのだが、(中略)ポシェットを首にかけ、横になって話をしながらもそれを開いて指を入れ、再びしめるなどして、もてあそんでいたのである。(238 岩 96)

46 (症状行為について)意識的なこととしてドーラが認めたのはつぎの二点である。一つ目は、彼女自身しばしば胃けいれんを起こしていたということ。二つ目として、ドーラの判断によれば、そのいところがマスターベーションを行っていると十分な根拠があるということであった。(241 岩 99)

47 夜尿が最初に呼吸困難を起こす時期のほぼ直前までつづいていたことは、すでに聞いたとおりである。(中略)ドーラが語ることができたのはただ一つ、「その頃父は病気から快復し、病後はじめての旅行に行っていました」というものであった。(242 岩 100)

48 ドーラがはじめてこの発作(喘息)を起こしたのは、山歩きで無理をして過労になったあとであった。山歩きでは、彼女は実際、いくぶん呼吸

困難を感じていたものと思われる。この呼吸困難について、彼女はつぎのような考えを思いついた。「父は山登りを禁止されている。父はすぐ息が切れるので、無理をしてはいけないうちになっ

49 2節注20 兄は感染症にかかるといつも自分にその感染症をうつし、兄自身は軽症ですむのに、自分は重症の経過をたどる、というのである。(中略) 兄もまた夜尿があったがそれは妹よりも先に始まった。ドーラは、「わたしは最初の病気になるまでは兄に後れをとることはなかったのですが、病気になって勉強で負けるようになったのです」と語ったが、それもある意味では一つの「遮断想起」であった。それまで男の子のようであったドーラは、病気になってからはじめて女の子らしくなったのであった。実際、彼女はおてんばな子供だったが、「喘息」になってから、おとなしく、礼儀正しくなったのであった。(245 岩 105)

50 不誠実であったためドーラが縁を切ってしまったあの家庭教師の女性がみずからの人生経験から、おところはみんな浮気者で信用できないとドーラに話していたことがあったようだ。(247 岩 107)

51 ドーラは、性交渉の時にも「濡れる」ということを、性交さい男性は滴の形の液体を女性に与えることを知っていた。彼女は、まさしくその点に危険があることを、つまり彼女に課せられている課題とは、性器を濡らさないように守ることであると知っていたのである。(253 岩 114-115)

52 ドーラは、母親の清潔好きはこの汚れに対する反動であると理解しているようであった。(253 岩 115)

53 K氏はドーラに、装飾品をプレゼントしたことはなかったが、おそらく「そのための箱(つまり宝石箱)」のプレゼントは行っていた。(254 岩 116)

3節、第二の夢は、「第一の夢から何週間も経たないうちに」に生じた。ここでも、本文は省略し、連想部分のみを引用する。



54 3節注1（なじみのない通りや広場をいくつか見ている、の後の注釈）ここでは重要な補足がなされている。「いくつかの広場の一つで、わたしは記念碑を見えています」。(256 岩 120)

55 3節注2（母の手紙に、父が亡くなったこと、おまえが来たいなら来てもいいと書かれていたこと注釈として）ここで補足されたことは、「この言葉のあとには、疑問符がついていました。「来たいのなら？」というように」。(256 岩 120)

56 3節注3（駅を100回尋ね、5分との返事を得た後、男性は「まだ2時間半」と言います、の注釈として）2回目くり返されたときは、「2時間」であった。(256 岩 120)

57 3節注4（家に着き、管理人に尋ねると母たちは墓地に行っていると答える、の注釈）そのつぎの面接時に、二つの補足がなされた。「わたしは階段を上がっていく自分の姿をとりわけはつきり見えています」、「お手伝いさんの返事を聞いたあと、わたしはまったく悲しみもせず、自分の部屋に上がり、わたしの机の上に置かれている大きな本を読みます」。(257 岩 121)

58 ドーラは、その少し前から、自分の行為とその行為の動機と考えられることの関係について、自分の方から質問するようになっていた。こういった質問の一つとして、「わたしはなぜ、湖畔の一件をはじめのうちは黙っていたのだろう」というものがあつた。また、「ではわたしはなぜ、突然両親にそのことを打ち明けたのだろう」という質問もあつた。(257 岩 121)

59（夢の見知らぬ街はBと推測したところ）ドーラはしかし、そこは絶対にBなどではなく、自分がまだ行ったことのない街であつたというのである。（中略）広場にある記念碑のことが補足されたので、そののちすぐにこの夢の像の源泉が何であるか明らかになった。クリスマスの時、ドイツのある保養地からドーラに、その街の風景を集めたアルバムの本が送り届けられていた。その本を、彼女はまさにその前日、家を訪れていた親戚たちに見せようとして探していたのであつた。しかしドーラはその箱をすぐに見つけることができなかったの、母親に「あの箱はどこでしょうか」と尋ねたのだった。（中略）アルバムの本を

ドーラに贈った人は、父親の工場のある町でかつてドーラが少しばかり面識をもった若いエンジニアだった。この若者はドイツで職を得たのだが、それはなるべく早く独立したかったからである。また、あらゆる機会を利用して、ドーラに自分のことを思い出してもらおうとしていたのだった。(258 岩 122)

60 クリスマスのとき、いとこの青年が訪ねてきたので、ドーラはウィーンの街を案内しなければならなくなった。（中略）このいとこのおかげで、自分がドレスデンにはじめて短い滞在をしたときのことを思い出したのである。（中略）別のいとこが、美術館の案内役を買って出ようとした。しかしドーラはそれを断り、一人で行った。彼女は自分の気に入ったいくつかの絵画の前で立ちどまりつづけた。あのシスティナの絵画の前では、彼女は2時間もとどまり、夢のようにうっとりとした静かな感嘆にひたつた。（どこが気に入ったかという問いに）ドーラははっきりと答えることができなかった。しかし最後に口を開くと彼女は、「マドンナです」と言った。(258-259 岩 123)

61 前日の晩、身内の集まりののち、父親はドーラにコニャックをもってきてほしいと頼んだ。「コニャックを飲まないで眠れないからね」と父親が言ったという。彼女は母親に食品棚の鍵を求めたが、母親はおしゃべりに夢中で返事をしなかった。そしてついにドーラは、我慢できずにつぎのように言い放ってしまった。「お母さん、わたしはさっきからもう百回も鍵はどこでしょうかと聞いているのよ」。実際には、彼女はもちろん、だいたい5回くり返しただけだった。(259 岩 124)

62 親戚たちの集まりで、そのうちの一人が父親に向けて乾杯の挨拶をし、父親がこれからもうずっと最高の健康状態でいられるように、などと期待の言葉をかけた。そのとき、疲れた表情をした父親の顔が奇妙にこわばつたので、ドーラは、父親がどういった思いを押さえ込まなければならなかったのか、理解したのである。「病人でかわいそうなお父さん！お父さんがあとのくらい生きられるかなんて誰にも分からないわ」。(260 岩 125)

63（もしおまえが来たいのなら？の疑問符について）そのとき彼女は、同時に、これらの言葉が

K夫人の手紙からの引用であったことにも気がついた。その手紙とは、(湖畔の) Lへ招待したい旨を伝える内容の手紙だった。かなり奇妙なことに、この手紙では、「もし来たいのなら?」と、この挿入文の直後、つまり文章の構造の中央に疑問符が置かれていたのである。(261 岩 126)

64 (湖畔の一件で、K氏に平手打ちをくらわせた直前のK氏の言葉)「分かるでしょう、わたしはもう妻とは関係がないのです」という釈明だけであった。ドーラはそのあと、K氏と出くわさぬように、Lへ向かって湖畔沿いに歩こうとした。そこで彼女は、出会った男性に尋ねた、そこまでのくらいかかりますかと。その男性の「2時間半かかりますよ」という答えを受けて、ドーラは歩いて帰ることを断念し、結局船のところに戻ったのだった。(中略) K氏は、この出来事について何も話さないで欲しいと懇願した。(261 岩 126-127)

65 そうであった。夢に登場した森は、まさしく今あらためて描写したあの一件の湖畔の森にきわめて似たものだった。しかし、同じよううっそうとした森を、ドーラはその前日、分離派の展覧会の絵画で見たのだった。その絵画の背景にはニンフたちが見えた。(261 岩 127)

66 (破瓜空想の推論を伝えた後) 忘れていた夢の断片が出てきた。それは、わたしは落ち着いた調子で自分の部屋に上がり、わたしの机の上に置かれている大きな本を読みますという内容であった。(それは百科事典ほどの大きさでしたか) そうです。(263 岩 128)

67 (のちになって) そういった想起が自分の中に現れたことを認めたのである。ドーラのウィーン行きがもう決まっていたとき、大好きな叔母が重病になった。また別の伯父から手紙が来て、息子が、つまりドーラのいとこが盲腸炎に罹り危ない状態なので、自分たちはウィーンには行けないと言ってきた。そのときドーラは、盲腸炎の症状とはどのようなものなのか、百科事典で調べた。(263 岩 130)

68 このときわたしは、叔母が亡くなってまもなく、ドーラがウィーンで盲腸炎と診断されていた何らかの病気に罹ったことを思い出した(本書22頁)。わたしはこれまで、この病気が彼女のヒ

ステリーによるものであると断言するほどの勇氣はもてなかった。ドーラはつぎのように語った。「最初の数日は高熱がありました。百科事典で調べたのと同じような下腹部の痛みも感じました。冷湿布による治療をうけましたが、それは我慢できないものでした。二日目になって、痛みが激しくなり、生理も始まりました。生理は病気になって以来、不規則だったのです。便秘も、その頃ずっとありました」。(263-264 岩 130)

69 そのとき、ドーラみずからがこの夢に最後となる補足をすることで、わたしが先に進めるよう助けてくれたのだった。その補足とは、わたしは階段を上にながら上げていく自分の姿を取りわけはつきり見ています、というものだった。(中略) さらにつづけて、つぎのように語った。「盲腸炎になってから、右足を引きずるようになって、うまく歩けなくなったのです。これは長いことつづきました。それで特に階段を避けるようになったのです。右足は、今でもときどきそうなります(以下略)」。(264 岩 130-131)

70 (盲腸炎に罹ったのが湖畔の一件の前であったか、あとであったか) 答えは即座に返ってきた。それは、全ての難題を一気に解決するものであった。ドーラは「9ヶ月後です」と言ったのである。(265 岩 132)

71 (踏み外したことはあるか) 確かにそういうことがあった。ドーラは幼いとき(7歳)、同じ右足をくじいたのである。彼女はBにいますとき、階段を降りるさい、足を滑らせて一段踏み外したのであった。(266 岩 133)

72 (夢の2から3回目のとき、今日で最後とドーラが言い出したとき、決めたのはいつかを聞かれて) 2週間前だったと思います。フロイト「それはまるで、お手伝いさんか家庭教師がする2週間前の事前退職願いのように聞こえますね」。ドーラ「あのころにも実際に退職を願い出た家庭教師の女性がKさんたちのところにいました。湖畔の街のLのKさんたちを訪ねたことです」。(中略)「湖畔での一件がおきる一日前か、二日前、その人がわたしをこっそり呼んで、「ちょっとお知らせしておきたいことがあるの」と言いました。そして彼女は「奥様がちょうど数週間留守にしていたときのこと、Kさんがわたしに近づいてきて、熱心に求愛し、どうかわた



しにやさしくしてくれないかと頼んできたの」と言ったのです。Kさんはそのとき、「わたしはもう妻とは関係がないのです」などと言っていたそうです・・」。(中略)(Kさんが家庭教師を気にかけてなくなり、その人は彼を憎むようになった話のあと)「いいえ、退職はしていません。退職しようとはしていましたが。彼女の話によれば、自分は見捨てられたと感じてからすぐ、この出来事を両親に伝えたそうです。彼女の両親はきちんとした人たちで、ドイツのどこかに住んでいるそうです。両親は、すぐにその家を出るように要求してきましたが、(中略)Kさんの気持ちが変わることがないかどうか、もう少し待っていたと言っていました」。(269 岩 138)

73 (家庭教師に同一化していること、両親に手紙を書いたことを指摘すると)「では、わたしはなぜ、すぐに両親にそのことを話さなかったのでしょうか」。フロイト「話すまでにどれくらい時間がかかりましたか」。「あの一件があったのが6月30日でした。母にそのことを話したのは、7月14日です」。(270 岩 139-140)

74 「この治療は自分には長すぎて、そんなに長く待つ忍耐がつかない」と彼女は言った。そう言いつつも、彼女は最初の数週間は、わたしの「完全に快復するまでにはだいたい一年くらいかかります」という言葉に、なんら異論を申し立てることなく、十分な理解を示していたのである。(285 岩 157)

### 考 察

フロイトのドーラの症例は精神分析の最愛の娘といえる、宝のような事例研究である。私は、これを何度も読みかえしているが、当初の人文書院の翻訳でなく、ちくま学芸文庫版(あるヒステリー分析の断片)、そして岩波の全集で通読してみても、翻訳の違いもあってか、今まで見えないものが見えたという体験をした。3つの翻訳を比較しつつ、その注釈の違いなど、興味深いことに気づくようになった。

ドーラの事例には、フロイトの理論的な部分が混入しているが、現在では重要視されていない理論(マスターベーション理論など)があるほか、理論の支柱としてもK氏転移説と同性愛説との間でフロイト自身が揺れ動いている。したがって、事例の記載の間に頻繁に記載されている理論部分については、用心深く取り除いていくことが

必要である。そうすると、事例そのものが浮き上がってくるのである。

筆者から見ると、上記の自由連想は、つぎのように分類される。筆者が重要だと思う順に記載してみよう。( )はダブルカウントのもの。

女性(いとこ、叔母、家庭教師)への同一化 9, 10, 11, 12, 25, 26, 28, 46, 50, 67, 68, 72, 73

K夫人への同一化 6, 13, 19, 29, 30, 35, 63

知的、性的好奇心 3, 4, (9), 19, 20, 21, (28), (30), 38, 43, 45, (46), 51, 57, 58, 66, (67)

母親 32, 36, 44, 52, 55, 59, 61

青年、男性のいとこ 56, (59), 60

ニンフ、聖母 (60), 65, 68

兄への同一化 1, 23, 24, (32), 39, 49

K氏 5, 8, (11), 14, 16, 17, (26), 27, 31, 34, (35), 37, 41, 42, 53, 64, (72)

父 親 (6), 7, 17, 18, (19), (24), (25), (28), (32), 33, (36), (41), (43), 47, 48, (61), 62

煙、タバコ 40, (41), (42)

口唇、おしゃぶり、食欲、胃 2, (12), 22, (23), 48

盲腸 (67), (68), 69, 70

失声、咳 (14), 15, 18, (48), (49)

その他 54, 56, 71, 74

以上を見ると、彼女は女性への同一化が頻繁であること、知的性的好奇心についての連想も頻繁

であることが分かる。女性への同一化については、特にいとこの妹との体験を示している28は、親しかったいとこと父との関係を契機にドーラといとこの関係が壊れたことを示している。10は、家庭教師と父との関係で、ドーラとの親しい関係が壊れたことを示しており、きわめて類似した体験である。さらに今回のテーマとなっているK夫人との関係でも、全く同じく、K氏を押しつけるほどの深い関係であったのに、K夫人がK氏を守ってドーラを支持しなかったことから親しかった関係が壊れており、極めて類似している。72は、K氏との関係でトラブルに陥っていた家庭教師の気持ちに同一化することで、家庭教師を裏切ったK氏への怒りにつながり、家庭教師への言葉と同じ言葉（妻はもう関係ない）を自分に使ったK氏への怒りへとつながっていることが分かる。

岩波版4節の注2では、フロイトののちの思いが綴られている。「終結から時間が過ぎれば過ぎるほど、K夫人に対する同性愛的な愛情のうごめきがドーラの心の生活の中の最も強い無意識的な流れであったことを、適切な時期に探り当て、彼女に伝えるのを怠った」とした。

これを裏付けるように、ちくま学芸文庫版の金関の解説に興味深い記述がある。

「1932年、未亡人になる前後、ウィーンで流行していたトランプゲームのブリッジの先生をして、それなりの収入を得ていた。そのときのブリッジのパートナーとしてドーラとともに仕事をしていたのは、ペッピーナ・ツェレンカとまりあのK夫人であった」。(デッカー フロイト、ドーラそしてウィーン 1900)

これは、女性だけでの関係を強める傾向を傍証するおもしろい記載であった。ただし、これがフロイトやラカンが論じるように同性愛とすべきかについては別問題としても、女性だけでの関係を強める傾向としては、確実に読み取れる。

さて、煙やタバコを吸ったことがある(42)という連想については、フロイトはタバコを吸っているフロイト自身と関係づけてK氏転移との理解をしたが、筆者は知的、性的好奇心とのつながりで、若い女性の枠をうち破るという非行体験のようにも感じる。女性同士でブリッジの指導者になった後の彼女を彷彿とさせる。

一方で、母親との体験は、きわめて悪い体験である。とくに、32に見られるように、ダイニングの鍵を閉めて兄を閉じ込めてしまうような過度な神経症的傾向が見られ、母親との安心した体験

が欠如する。それゆえに身近な他の女性たちを求め、さらに父親にもプレディパルな体験を求めていると考えられる。フロイト自身の論文では、母親については否定的な言葉で簡単にかたづけられているが、ここであげただけでも6つの箇所でも豊富な連想をしていることから、母親との不満な体験、母親への怒りなどが彼女の人生において大きなものとなっていたと考えられる。

ドーラの事例をめぐっては、すでにラカン(1951)が『エクリ』において明快な再考を行っていて、極めて奥が深い。日本でも、ユング派の視点で小川捷之(1993)が、ラカンの視点で小川豊昭(1993)が興味深い分析をしている

ラカンは、この事例では3つ弁証法的裏返しという機会があらわれたものの、フロイトはその一部しか取り扱っていないとする。ラカンによると、第一の対話的うら返しとして、フロイトは「おまえが嘆いているそのごたごたの何がおまえ自身なのか、よく考えてみよ」と彼女に言う。

のちにセミナーにおいてラカンが述べた言い方では、「ふしだらなことだとあなたが憤慨していること、それはあなた自身も関わっている何かなのではないですか」という問いになる。(ラカンのセミナーの『対象関係』は、1953年から始まったセミナー4年目の内容をまとめたものである。1957年1月の論考)。

ここから第二の真実の展開が起こる。

「つまり、この二人の(父とK夫人の)恋人同士の交際が続くことを可能にした作り事が作り事のままあり続けられるのは、単に秘密にして口外しないと言うことによってばかりではなく、ドーラ自身の共謀によって、さらには彼女の細心の気配りによる保護によってなのだ、ということなのです」。

これを小川豊昭の言葉で言うと、「ドーラ自身も4角関係の共謀者だ」というフロイトの指摘で展開していく。

小川豊昭によると、ここから、ドーラの無意識の幻想であるオーラルセックスが、咳、吐き気、失声などと関連している事が展開されていく。2番目の展開は、「ドーラの父親への嫉妬は、実はK夫人への嫉妬である」。「お前(ドーラ)の欲望の対象は彼女だ、お前は男だ」というフロイトの解釈から始まる。ここから、K夫人との関係が展開されていくはずであった。

そして、第3の弁証法的逆転は、なされていない次の解釈である。「お前が男性(K氏)に同一化して対象として欲望としたこの女性(K夫人)

はお前自身だ。お前は、K夫人の魅惑的白い体だ。偽対象なのだ」。

ラカンの視点で見ると、フロイトは2番目の途中ぐらいまでしか解釈を行っていない。フロイトが半分気づいていた同性愛の部分拡大していくと、ドーラは男性の視点でK夫人を欲望の対象としているということになる。また、更に進めると、男性を拒否するシスティナの聖母像に同一化しているという事になるのである。

さらにおもしろい事に、小川豊昭はこの事例にフロイト自らが現われているとし、女性の側から見ていると指摘する。つまり、ドーラの症例の記述にはフロイトの女性的部分が現われているといえる。

ラカンがセミネールで述べた言い方によると、「ヒステリー者とは、代理人を立てて愛する者である」、「父親は欠如した対象（ファルス）を象徴的に与える者として現れるが、ドーラの父はそれを与えられていない」。そして、弁証法的な三角形に戻るためにK夫人が重要となった。さらにK夫人はシスティナのマドンナとの象徴的連想を持つ。しかし、K氏が「私にとって妻は何でもない」と述べたことから、三角形が崩壊することがドーラにとって耐えられなかったとする。

さて、ユング派的な視点で論じた小川捷之の論文も興味深い。特に第二の夢の分析で、ドーラは「父による救助を断念した」のだという理解をする。そして、離人感に近い実感のなさを指摘する。父も母もない喪失感を体験するドーラは、本を読むという知的作業を自分に課すことで、状況に対処しようとしているとした。ただ、小川捷之は、「ドーラがフロイトの喜ぶ病的な材料を懸命に提供し、治療者によって自分が理解されるように努力した経緯が我々には伝わってくる。フロイトに対しても、K氏に対していた時と同じように、かなり辛抱して待ったといえるのである」として、フロイトからの分離の時期に第二の夢が現れたと考え、自己治癒力のようなものを示唆している。

ちなみに、ドーラ研究を行っているマホーニー(1999)、(2000)はフロイトに批判的であり、むしろドーラが置かれた環境に重きを置いている。治療が1年の約束で、「3ヶ月で止めたのは、残りの9ヶ月で彼により身ごもることを避けるための、象徴的手段であった」とするが、これはK氏転移論の延長となる可能性がある。

土居健郎(1964)は、フロイトのいう同性愛感情は甘えに相当すると論じ、欧米人は甘えが通常

同性愛的感情という形以外で出てこないかも知れないとした。ドーラの感情を甘えとすることは、筆者にはやや拡大させすぎているような気がする。なぜなら、日本でも思春期の女子には、(特に女子校で)女性同士の恋愛感情は一時的に発生することは知られているし、その場合男性の身に立って女子を愛するというのはドーラとさほど変わらない。甘えだけではこれらの現象を説明できなくなってしまう。

以上、ラカンなどの論述を参考にしながら、改めて考えると、ドーラは豊かな自由連想をしていたのであり、様々な記憶をよみがえらせ、イメージの豊富な連関が見て取れる。フロイトについては、K氏転移というよりも、知的好奇心を満たす関係であったと言えまいか。その意味では、フロイトは家庭教師やK夫人と同じレベルなのであった面もあり、小川豊昭の指摘するようにフロイトは女性的だったと言える可能性もある。自由連想は、セラピストの問いや解釈によってさらに深く展開するはずである。ドーラの事例はそれが途中で終わったことから、実際に何が真実であったかは不明であるが、自由連想部分に忠実になることで、さらに議論を積み重ねることができよう。さらに、自由連想自体が自己治癒力を持つ可能性が認識された。小川捷之が言うように、フロイトとは別に、ドーラの内部で起こっている分離個体化のプロセスがあり、知的好奇心の方に向かう自己治癒が働いているのであろう。

今後の課題としては、個人や社会の自由連想を丹念に聞き取ることによって、個人や社会に変化が現れるかどうかを見てゆくことが重要となろう。さらに、個人や社会に自由連想を許容するための体制作りも、今後の課題として大切な視点となろう。

## 引用文献

- 小川捷之 1993 ユング派からみたドラの夢 吾妻ゆかり、妙木浩之編 フロイトの症例 現代のエスプリ 317 1993/12
- 小川豊昭 1993 精神分析の最愛の子、ヒステリー患者ドラ 吾妻ゆかり、妙木浩之編 フロイトの症例 現代のエスプリ 317 1993/12 61-69
- 土居健郎 1964 神経症の日本の特性 土居健郎選集1 岩波書店
- 平井正三 2009 自由連想あるいは言論の自由について 日本精神分析学会第55回大会抄録



## 集 9-12

- 平井正三 2010 自由連想あるいは言論の自由について 精神分析研究 54 (3) 251-260
- フロイト 1905 あるヒステリー分析の断片〔ドーラ〕 渡邊俊之, 草野シュワルツ美穂子 訳 フロイト全集5 岩波書店 2009
- フロイト 1905 あるヒステリー分析の断片ードーラの症例 金関猛訳 ちくま学芸文庫 2006
- マホーニー 1999 フロイトの書き方 北山修監 訳 誠信書房 205-208
- マホーニー 2000 パトリックマホーニー教授の講演会 ああ！可哀想なドラ みんな彼女の

病気を知っていたのに 鈴木ありさ, 塙美由貴訳 平成8年4月24日 福岡大学セミナーハウス 主催 福岡精神分析研究会 九州力動心理療法研究会

ラカン 1951 転移に関する私見 1951年の通称ロマンス語精神分析者の会議での講演 ECRITS Edition du Seuil, 1966 高橋徹訳 エクリ 宮本忠雄他訳 弘文堂 1972 289-305

ラカン 1994 ドラと若い同性愛女性 対象関係上 167-188 ジャック＝アラン・ミレール 編 小出, 鈴木, 菅原訳 岩波書店 2006